

銀制度の維持にあり、随つて配當を擧げるには、銀貨制度を絶対に存続せしむる必要があるのである。斯て銀貨制度は、成全せる一個の社會では無く、相互の利害が相異り相反撥し合つて居る二個の社會の基礎であることが見出されるのである。即ち一方の社會は、田園労働者が土地と分離されて居ると等しく、其労働の生産物から分離されて居る賃銀奴隷の大軍である。而してもう一方の社會は、五六百萬の人間と、其一族郎黨食客で出来て居る。假に労働階級の中に潜在して居る未知の可能的管理能力を、商業に参加せしめないことから起る消極的浪費を全然勘定に入れないまでも、此組織の中にどんな積極的浪費が含有せられて居るかを、明かにして見よう。吾人は茲に再びビンネー・デイブリー氏の説を引用する。

『人口十萬のオールド・ハム市は、纖維材料の普通の計算に随つても、優に全歐羅巴の正則な需要を満たして猶餘りある錘数を有して居る。ランカシャーの他の産物と同じく斯様な産物を取扱つて之を賣捌くには、ランカシャーの他の都市の販賣費は問はず、單にマンチエスター及びリヴァプール商人と問屋丈けでも、綿糸關係の一切の製造工業に必要な生産費より、遙かに多額な資本を使用して居るのである。今日に於ては、世界中で最もよく組織せられ、最もよく分化せられたる産業の場合でさへ、生産費よりも販賣費の方が膨脹して居ると云つても、大體は間違は無いのである。』

品物を作るよりも賣る方に餘計費用が掛かるとは、一體どうしたことであらうか。そんな理屈の在る筈が無い。然しながら、何時とも知れぬ昔から、奴隷制度の時代でも、賃銀奴隷制度の時代でも、單に製造することよりも、利益を見て賣ることの方が得てあることが知られて居た。それはテ

イレに於ても、カーセージに於ても、プロトレンス、デユノア、及びヴェニスに於ても知られて居た。其れはマンチエスターでも知られて居る、リヴァプールでも知られて居る、其等の都市に於ては、大藏卿の口に涎を流させるような輸入輸出に港税を課するのである。然し七百萬の人口を擁する倫敦を思へ。デイブリー氏は斯う云つて居る。『生産の爲めに『動力』を用ふる所の、近代的意味に於ける工業に就ては、倫敦は殆ど何にも知らない。此奇妙な事實の證據は、僅かに數年前の倫敦商業委員會の報告部に見出される。當時倫敦には、工場法の適用を受くるものとして記録された工場が、六百三十八あり、其平均馬力は五十四であつた。工場法の下に、倫敦市内に於て使用される全動力、主として新聞印刷に用ゐられる其れは、三萬四千四百五十馬力であつた。即ちモーレタニア號の航行に必要な動力の丁度二倍である。然も倫敦の富は、大英國に於ける其の最大工業都市の富を、遙かに凌駕して居るのである。實際の生産とは關はり無き、此純然たる財政的膨脹は、紐育や市俄古に於ても、等しく見られる所である。』

四

吾人社會は二様の地代、二様の利子、二様の利潤を徴取されて居ると云ふ事實——即ち吾人が賃銀制度の門口から經濟問題に近づくかぬ限り、其意味を十分に理解し難い事實を、反復力説して來た賃銀取得者は、賃銀と交換に生産上に於ける其利害を賣却したるが故に奴隷ではあるが、其れにも拘らず、猶ほ富の眞の生産者たる事實に變りは無い。生産者としての彼は、製造業者の拂ふべき地